第４回 なぜ人はカルトに惹かれるのか 脱会支援の現場から

教職員を対象とした「現代的課題と建学の精神プログラム」。第４回はカルトについて。「悪質な教団などにマインドコントロールされて入信した人に正しい情報を与えて脱会させる」のがカルト対策なのか。カルトってそもそも何か。どうして人はカルトに入っていくのか。私たちは入信する人の人生の疑問や迷いに、共感し向き合ってきたのでしょうか。入信脱会を経験し、脱会支援を続けておられる講師の気づきを通して、カルトについて考えました。

日時　2021 年 6 月 4 日（金）　13:30～15:00
講師　瓜生　崇　さん　真宗大谷派玄照寺住職
場所　オンライン（参加　33 名）
動画　https://youtu.be/WMSOmoGAYFU

ご紹介頂きました瓜生と申します。私はカルトからの脱会支援とかカルト対策を 15 年ほど続けております。実は今、コロナ禍でカルトの活動はかなり鈍っていて相談も減っています。カルトへの注目度が非常に弱まっている状況にあります。カルト問題への注目度は、大きな事件が起きたり深刻な被害が起きたりした時に一時的に大きく盛り上がり、テレビや新聞などのメディアでも話題に上がるようになります。しかし、そういう大きなことがないとすぐに忘れ去られてしまいます。先日、ある新聞から取材依頼があり、「コロナでカルトの勧誘が増えているって本当ですか？」と質問されました。「そんな事実はありません」と回答したら、その後は返事がありません。話題性がないとメディアはカルトの問題について取り上げてくれないのです。その点、大学は毎年必ずカルト問題がどこかに潜んでいます。このように定期的に取り上げていただけるのは本当にありがたいことです。

お話しする前に、龍谷大学の竹内綱史先生の講演録（『りゅうこくブックス 134』収録）を読ませていただきました。内容が非常に正鵠を得ており、ずっとカルト対策をやってきて私からしても「そうだな」と思えるものがたくさん書いてありました。この講演の後に読んでいただけると理解が深まると思います。(学内宗教部ブースに設置されています/宗教部)

自分は大丈夫と思う人ほどハマりやすい

ほとんどの方は「カルトは自分とは関係ない」「私がハマるわけがない」と思っていると思います。しかし、それは違うんですよ、ということをわかっていただきたいと思っています。

たとえば陰謀論というものがあります。コロナに関しても、「ワクチンを打ったら 5G に繋がる」とか、「人口削減計画のための人体実験だ」とか、そういう荒唐無稽な噂が広まっています。2011 年に震災があった時にも、今考えると何であんなことが出てきたのだろうと思うような科学的ファクトを無視した言説がありました。歴史学的なことについても、歴史修正主義というか、ほとんど歴史的なファクトに基づかない主張があったりします。そういったものは、普通に考えてみたら荒唐無稽で考えられないような主張です。しかし、そういうものを頭から信じ込んで人の批判も許さないという人たちが実は沢山居ます。

そういう人たちを見たとき、「自分とは関係ない」とか「私はあんな変なのにハマらない」とか「あんな変なのにハマってしまった人は可哀想だ」とか、「一部のおかしな人がハマってしまっている」とか、そんな感じで見てしまいがちなのではないでしょうか。

カルト宗教でも同様です。普通に考えたら考えられないような事を言っている人たちがいます。そういう人たちを見て、私たちは、「知的に劣った人だ」とか「考える能力が不足している」とか「人間性に何かが足りない」とか、そう思ってしまいがちです。しかし、それは間違いです。　むしろ、「そんなのハマらないよ」「私と関係ないよ」と思っている方が最もハマりやすいのがカルトです。なぜそういうことが言えるのかということを、今日はお話ししていきたいと思います。

カルトにしても陰謀論にしても、または歴史修正主義にしても、知的な能力が劣った人がそういうものを信じているのでは決してありません。我々と同じように一生懸命物事を考えて、ちゃんと冷静に理解して、世の中のために役立って、みんなを幸せにしてあげたいと強く思っている人が、信じていくん

です。これが、カルトの問題の恐ろしさです。

今日、皆さんはこうして聞きに来てくださっているわけですけども、こういう任意の講演会とか講座っていうのは、なかなか行かないものですよね。忙しい中で、わざわざ時間を作って聞きに来てくださっているということは、社会的な問題とかカルトの起こす問題とか、そういうものに高い関心を持っている。いわゆる意識が高い方々なのだと思います。実は、そういう方々が入りやすいのがカルトです。

人民寺院の事件

カルトの問題について大学で必ずお話する重大な事件が、かつてありました。歴史の中では忘れられかけているんですけれども、世界をカルト問題に目覚めさせることになった極めて重大な事件です。写真が写っていると思います。これ、良く見たらバラックみたいな建物の周りに人がいっぱい倒れていますよね。「これ何か知っていますか？」って今学生に聞いても、答えられる学生はほとんどいません。これは人民寺院という教団が起こした事件の写真です。

1955 年にジム・ジョーンズという青年牧師が設立したのが人民寺院という教団です。この人はプロテスタントのメソジスト派の学生牧師でした。

人種差別撤廃という信念

このジム・ジョーンズという人は非常に真面目な人でした。彼が何を主張していたかと言うと、人種差別の撤廃、貧困層の救済なのです。当時は、第二次世界対戦が終わった直後の時期です。アメリカでは黒人と白人が人種を越えて教会で礼拝するということは、とても考えられないことでした。今の我々からしたら人種を超えて神様にお参りすることなんて当たり前のことですが、当時は全くそうではありませんでした。

1960 年代のドラマでスタートレックというのがありました。これが、ある放映回からアメリカの、特に南部でガクンと視聴率を落としました。なぜ落ちたのか。つまらなかったからではありません。ドラマで黒人の女優と白人の男優がキスをしたんです。

それを見た少なくない親が「黒人と白人がキスをするなんてことはけしからん。もう子どもに見せるわけにはいかない」と、その後スタートレックを見せなくなってしまったと言われています。60 年代ですらこんな感じです。

当時 1955 年と言えば、マルコム X とかキング牧師が出てきた時代です。そんな時に「教会も人種を越えて開かれたものであるべきだ」という主張は反発を生みました。全ての人種に開かれた教会になろうと決めた時、教団の長老会幹部とか有力者は軒並み反対しました。しかし、この反対した人たちもキリスト教の教えに生きているわけですから、人種差別に肯定的なのかと言うと、勿論無くすべきだと思っているんです。少なくとも、建前としてはそうでしょう。しかし、こういう時に偉い人が言う言葉は決まっていて、「時期尚早だ」と言うんですね。

私は、真宗大谷派という浄土真宗の伝統教団に所属しています。今、大谷派では男女差別について非常に大きな議論をやっています。男女差別をなくして開かれた教団にしようという運動をしていますが、それが正しいということはみんな解っているんだけども、「時期尚早」と言って止まってしまう。同じようなことが当時もあったということです。

人種差別撤廃を推し進めることでジム・ジョーンズは非常に大きな反発を受けていきました。結局、彼は「こんな分からず屋の人たちと一緒に居ても仕方がない」と、新たな教会を立ち上げていくことになります。それが人民寺院。

人民寺院は、一見ジム・ジョーンズの理想通りに進んでいたように見えました。設立して間もない頃は 7 割の黒人信者と 3 割の白人信者が居たと言われています。実際に、人種に対して開かれた教会になっていたということです。

人民寺院は様々なところから攻撃を受け非難を受けていきます。

カルトは批判を聞かない（聞けない）

これは非常に難しい問題ですが、非難を受けた時に人間はそれをなかなか聞けません。実際のところ、批判の中には的を射たものもあったと思います。しかし、ジム・ジョーンズは自分が正しいことをやっていると強く思っていました。そして、それは実際に正しいことでした。教会において人種差別を撤廃していくということが、正しいか間違っているかと言ったら、これは我々の感覚から見ても当時の人たちから見ても正しいことです。「自分たちは正しい事をやっているんだ」という感覚が批判をはねつけていったんです。

これはカルトの特徴の一つです。カルトとそうじゃない人間組織っていうものの大きな違いは何かと

言うと、批判できるかどうかなんです。

例えば浄土真宗本願寺派という教団があります。この教団が、カルトじゃない理由って何なのかと言ったら社会問題を起こしてないとか、そういうことではありません。どんな教団であっても人間が居る以上は社会問題を必ず起こしています。

じゃあ何が違うのかと言ったならば「中で批判ができる」って事です。「我々の教団はおかしいんじゃないか」と声をあげることができる。また、外部からそういう批判があった時に、それについてちゃんと向き合って考えることができる。それが、浄土真宗本願寺派がカルトではないという証です。

私がかつて所属していた浄土真宗親鸞会という教団があります。この教団がカルトかどうかというのは結構微妙なところですが、非常にカルト的なところがあると言われています。親鸞会は、外からの批判には全く耳かしません。内部においても、もし「我々はおかしいんじゃないか」というような声を上げたならば大変酷い目に遭わされます。「自分達は絶対に正しいのだから、批判する者が 100%間違っているのだ」っていう風になっていくんです。

オウムにしても、統一協会にしてもそうです。人間は正しさに依存してしまうと批判が聞こえなくなるんですね。

信念（正しさ）による暴走

当時の社会にも問題があったと思います。人民寺院の人たちを積極的に受け入れようとしませんでした。それによって、周りで見ている人たちと中にいる人たちが断絶されてしまったわけです。

外部と言論的に断絶してしまうと、一つの強力な信念を持った人間の集団が浄化して暴走していきます。これは、宗教だけではなく様々な場所で見られる現象です。

以前、広島の呉というところでこのお話をした時、終わってから是非話をしたいという方がお見えになりました。60 歳くらいの背筋のピンと伸びたガッチリとした男性でした。私が「何かご質問ですか？」と伺うと、「私、退官しましたけども自衛官をやっていまして護衛艦に乗っていました」って言われたんです。そんな人が私に何の質問だろうかって思ったら、質問ではありませんでした。

海上自衛隊の中で、「日本を守っていくんだ」とか「人の命を守っていくんだ」というような一致団結した信念を持ってやってきたけれども、いじめが絶えることがなかった、と仰るんですね。その方は「ずっとその理由がわからなかったんです。でも、今日のお話を聞いて、誰も反論できない信念を持った集団で、外界からある程度隔絶されていると、その信念に従えない人を排除して行くようになるんだということがわかりました」、と言われました。

運動部なんかでもそうですね。たとえば日大のフットボール部でいじめがあったことがありましたけれども、体育会系のサークルなんかでも起きやすい現象です。練習をして強くなって相手を負かせて順位をあげて行く。誰も反論できない信念です。もし、そこに反論してしまったら体育会系のサークルとして成り立ちません。さっきの自衛隊でもそうですよね。国民を守り、国を守るんだっていう土台を失ってしまったら、もう自衛隊としての体を成さないわけです。ですから、そこには絶対に反論できない。反論できない信念を持つと、それに合わない人を排除したいとか、いじめてその人の心を変えていくっていうことになりがちなんです。

宗教でもそうです。私がいる大谷派という教団でも「なんで我々には残業代を払えないんですか」と訴えて残業代を申請した人に対して、「残業代を申請するなんてことは信仰がない者がすることだ」と言って、その人をパワハラでいじめて排除してしまったっていう事件がありました。

信仰ということは教団にとっては絶対に不可侵です。そこに合わない人は排除していく。合う人ばかりで固まって、外部からの批判、内部からの批判をはねつけていくようになる。　この現象は、カルトが成立していく一つの課程です。大体、カルトはこうやって出来上がっていきます。人民寺院も同じ道を辿っていきました。外に対して耳を閉ざし、中に対して批判する者を排除していきました。当然、いじめとかパワハラが多く出てきます。

ガイアナへの移住とコミューンの設立

人民寺院は 1973 年に南米のガイアナに移住します。そこで、移住した町にジョーンズタウンという名前を付けます。教祖の名前を町に付けるという時点でちょっと危ない感じがしますよね。この辺で、既に組織としては危険水域に達していたのだと思います。人民寺院は人里離れた場所で、自給自足のコミューンを作って生活するようになっていきました。そうすると、より一層外部からの声が聞こえなくなって行きます。そして、中で人権侵害が行われていくようになっていきました。やがて、人権侵害が起きまして、周囲からもどうも人民寺院はおかしいんじゃないかという声が出てきます。

1978 年にアメリカの上院議員であったレオ・ライアンという人が視察に行きました。しかし、ライアンが視察してみたら、みんな真面目に仲良く、ニコニコと働いているように見えました。それでライアンは安心したんですけども、ある信者からメモを渡されます。そこには「私はもう帰りたい」というようなことが書いてあったんです。

ここから離れたいという思いがあっても、この集団の中ではそういうことが言えなくなってるんじゃないかってことにライアンは気付きました。

そして、人民寺院の人たちに向かって「この中で帰りたい人が居るなら、私が乗って来た飛行機に乗せていくから申し出てほしい」と言ったんです。そうすると、5 人が手を上げました。

そして、ライアンはその人たちと飛行機に乗って帰ろうとしたんですが、途中で教団の人に襲撃を受けて皆殺しにされてしまいました。

それを知って、今度はアメリカが軍隊を派遣しました。そして駆けつけた人たちが見た光景がこの写真の光景だったんです。

ライアンたちを殺してしまった後、教団の内実がバレると思ったジム・ジョーンズは、かねてから用意していした集団自決を発動しました。自殺訓練というのをしていたんですね。みんな青酸カリの入ったヨーグルトを飲んで死んでいました。死ぬことを拒んだものは殺されたと言われています。結果、920 人の方が亡くなってしまいました。

人間が、正しさを求めて、正しさに依存して、暴走していってしまうとこうなるんだということを如実に表した事件でした。これ以降、カルト問題が注目されるようになってきました。

オウム真理教事件

この後、今度は日本において大きなカルト事件が起きます。オウム真理教事件です。みなさんはこの写真を見たらすぐにオウムだなって分ると思いますが、これも学生の中には知らないという人が増えてきました。

麻原彰晃の写真です。地下鉄サリン事件、そしてその下にはオウムの集会の様子が出ております。右上は麻原彰晃が空中浮遊している写真ですね。私たち世代の人は見る機会がたくさんあった写真です。この写真を見てオウムに入ってきた人も数多くいました。

右下の写真にはとんねるずの横に麻原彰晃がいますでしょう。あの当時、麻原彰晃はテレビに非常に露出していて芸能人なんかとよくコラボしていました。テレビウケが大変に良い人だったんですね。朝まで生テレビなんかに出たりとか、ビートたけしのテレビタックルなんて番組に出たりとか。

じゃあ、その麻原彰晃ってどういう事件を起こしたのかっていうと、有名なものは坂本弁護士一家殺害事件、それから松本サリン事件、地下鉄サリン事件っていう大きな事件を三つ起こしています。他にも一杯いろんな事件を起こしました。

最も大きいのは地下鉄サリン事件です。12 名の方が亡くなって 6300 人が負傷されました。その中には今も深刻な後遺症と戦っている方が大勢いらっしゃいます。

何故、こういうことが起きてしまったのでしょうか。当時、麻原彰晃という人間は世間からどう見られていたかと言いますと、みんながみんな「この人、胡散臭いな」って思っていたかというと、そんなことはないわけです。この写真に写っている方はダライラマです。このダライラマが弟子の反対を押し切って「麻原彰晃は能力のある宗教的指導者であり、オウム真理教は大乗仏教を広め公共の善を促す宗教だ」とお墨付きを与えました。

上祐史浩という麻原の高弟がいます。今は「光の輪」という教団をやっています。彼なんかは「あなたは麻原彰晃の側に居たのに、インチキだって気づかなかったんですか？」って聞かれた時、「そんなこと言っても、ダライラマが自分の弟子だって言っているような人がそんな変なことすると思わなかった」って言っています。当時は、麻原に対して似たような感想を持っていた人が一杯居たと思います。では、ダライラマは人を見抜く力が全くない人だったのかって言ったら、そんなことはないはずですよね。

オウムの真実性

私たちは自分の常識で麻原のことを「何であんな胡散臭い変な人」と思っているのかもしれません。でも、私たちの常識だけが正しいわけじゃないんです。むしろ、仏教について真面目に捉えて、本当にその教えによって救われたいと思う人にとっては伝統教団よりもオウム真理教の方が真実味のある教団に見えたんです。

今、オウムはアレフという名前になっていますが、私の寺にアレフの信者さんが来ることが何度もありました。今でも忘れられないんですが、ちょうど今くらいの時期にアレフの信者さんが来た時のことです。二人で 3 時間ほど色んな話していました。その彼の手に蚊が止まったんですね。私は「あ、蚊がとまった！」と思ったもので「ちょっと待って」と言って、その人の手をパチンと叩きました。そうしたら、蚊が死んで落ちていきました。私は「やった！」と思ったんですが、その人は呆然として私を見てい

るんですね。私をギッと睨んで「瓜生さん、なんてことするんですか！」って言うんですよ。私は「え？なんか悪い事した？」とこう言いますよね。そうしたら「蚊を殺したでしょ！」って言うんです。「ここは御御堂でしょう。仏教の道場でしょう。こんな所でなぜ蚊を殺すんですか！？」って、私を問い詰めていくんです。私は「いや、浄土真宗ではそういうこと言われないものですから……」って言うんですが、その人は「浄土真宗だって仏教でしょう！蚊がとまっても、パッと払えばいいものを、なぜ殺す必要があったんですか？」と、こう私を問い詰めていきました。

我たちは蚊が飛んでいたら蚊取り線香やベープマットを焚くなり、あるいは手にとまったら打つなり、平気でそうやってますよね。じゃあ、そういうことを良心の呵責なく平気でやってしまうのが仏教徒のすがたなのか、殺さなくて済むんだったらスッと払って逃してやるのが仏教徒のすがたなのか。本来の仏教は後者なんですよね。殺さないようにっていうのが本来の仏教の姿だと思います。

浄土真宗は違うのかっていうと、浄土真宗だってそういう要素がないわけじゃない。だからその時、私は恥ずかしくなってしまいました。

オウムのサティアンに入った機動隊の人にインタビューしたことがあるんですけれども、あの中にはゴキブリとかハエが沢山居たそうですよ。なんでそんなに居たのかって言ったら殺さなかったからなんです。「殺してはならない」ってことを真剣に守って、ゴキブリとかハエとかを逃がしてたんです。毒団子を入れたり、ゴキジェット噴霧したりとか、そういうことをしなかったんです。

そんな「殺してはならない」という教えなのに、なぜ地下鉄でサリンを撒くんだって矛盾はありますけど。これが彼らの姿だったんです。職業も何もかも投げうってそういう道を求めていったんです。

BMW とかベンツとかに乗ってる坊さんとどっちが坊さんらしいですか。「肉食妻帯しても俺たちの宗派ではこれで良いんだ」って言って開き直ってるお坊さんと、どっちが仏教らしいですか。

我々は我々でそういう中に生きてきたもんですから、それが当然だと思ってるかもしれませんけど、本当に仏教を心から求めて救われたいと思うような人たちは、むしろ我々のような伝統教団よりもオウム真理教の方が真実味があるって思ったんです。

だから、「なんであんなインチキ臭いのに入ったのか」と勘違いしがちなのですが、かえって彼らは私達の方をインチキ臭いって見ていて、オウムを真実味があると思っていたんです。それは、ただ騙されたとかマインドコントロールされたということじゃなく、オウムには彼らが本当に求めたものがあると思わせる物があったんです。

普通の人であった信者たち

良くオウムに入る人は「アホだから入ったんでしょ」「科学的な思考力がなかったんじゃないか」って言われるんですが、全然そんなことないということを知ってもらうために学生にはこれを見せます。これはオウムの幹部の学歴です。東大、京大、阪大、東工大、早稲田、慶応、筑波って並んでいますが、偏差値上位の大学が並んでいます。この人たちは科学的な思考とか考え方については人一倍持っていました。そう言うと、今度は「彼らは試験勉強ばっかりしてて、頭でっかちで、人間の情感ってものがなかったんじゃないか」と言う人がいます。村上春樹は「彼らは小説を読んだことがなかったんじゃないか」と言っていましたが、彼らは人一倍小説を読んでいます。一般的な大学生よりずっと一杯いろんな物語を読んで、情感が豊かで情に厚い人たちです。

彼らは、私たちと何が違うのか、異なる傾向があるのかって言いますと、「ない」と言っていいと思います。もしあるとしたならば、人生に対して真面目であるっていう事ぐらいです。彼らには思考力もあったし、真面目だったし、色んなことを知っていました。彼らには「親の愛が足りなかったんじゃないか」と、そういう意見まであったんです。そんなこと簡単に言ってはいけないことですよね。少なくとも私はそう感じたことはなかったですね。オウムに入った人たちは、愛情たっぷりに育って、しっかりと会社に入って、ちゃんと働くなり、あるいは大学に入ってきちんと勉強するなり、人並みにグレたりとか、思春期にはいって色々とつまづいたりとか、私らと同じような人生の経験を重ねてきた人たちです。

彼らは私らと何か断絶したような、一定の傾向のある特別な人間だってことは全くないと私は思います。

宗教家としての麻原彰晃

中沢新一という有名な哲学者は麻原彰晃について「知性においてかなり上等なレベルにいる人だと思いました」と言っています。テレビなどでの受け答えなんかを見ていますと、相当に頭が良い人だと分かります。そうでない人が、あれだけの人たち惹きつけられるわけがないんです。

私は麻原彰晃の説教をかなり聞いています。真宗大谷派で最も麻原彰晃の説教を聞いた人だと言われています。一時期、法務省からオウムの教義と光の輪の教義について研究して欲しいという依頼があり、麻原の説教を 70 時間ぐらい聞きました。

車の中でずっと麻原の話を聞いていました。飲酒

検問で止められたことがあって、お酒は飲んでないのでそれは良かったんですけど、カーステレオから麻原の説教がずっと流れていたんです。DVD で流していたので、警官がそれを見てちょっとすいませんと、パトカーの後ろに乗せられたこともあります。とにかく麻原のお説教を一杯聞きました。

それでどうだったかって言ったら、本当に瑞々しい宗教的感性の持ち主だという感想しか出てきません。結構凄かったです。原始経典講義とか、今は絶版になって手に入らない麻原の講義録なんかも一杯あります。龍谷大学の専門の先生なんかがご覧になったらアラは一杯見当たるかもしれませんけども、私が見た感じではかなりちゃんと書いています。

当時のオウムには経典の翻訳チームがありました。彼らはコンピュータを使ってパーリ語の経典を現代語に直接翻訳するという営みを地道にやっていました。それを、弟子がテープに吹き込んだものを麻原は朝から晩まで聞いていたと言われています。

私にはその完成度については判断できませんが、彼らは彼らなりに真面目に教典を読み解こうとしていたということがよくわかります。

オウムは今アレフという教団に成っています。これはアレフの信者が大学で勧誘する時に配布する資料です。ベーシックダルマと書いてあります。これは仏教の入門書として非常に良くできています。十二因縁・四正諦・八正道などが、凄くわかり易く丁寧に解説されています。

私は、オウムは仏教についてトンチンカンなことを言っているのだと思っていました。勿論、そういう所もあるとは思いますが、この入門書なんてちゃんとしています。八正道や十二因縁なんて解説されているとは思ってもいませんでしたからね。もちろん、彼らなりの言葉の使い方がありますから、私たちと違っている所はあります。しかし、基本的にはちゃんとしています。この他にも、いろいろ読みました。

我々はオウム真理に入る人は、騙されているとか、マインドコントロールされているとか、普通なら信じるわけがないような事を信じさせられている人だと考えがちですが、そんなことはありません。

マインドコントロールが有ったのか無かったのかということでしたら、当然有ったと思います。しかし、それだけで人は入らないですね。

一年ほど前、「オウム家族の会」に呼ばれて講演させてもらったことがあります。そこで私は「オウムの教義大系は結構立派なものだ」と言ったんです。こんな事を言ったら、家族の会の人なんかには随分と反発されるだろうとは思いました。でも、話が終わった後、みんなが「どうもありがとう」って言うんです。誰も信じないような馬鹿馬鹿しいものを自分の子どもが信じたっていう風にずっと言い聞かせられていて、本当に辛かったけど、そんなことないんじゃないかと思っていたと。あんなに真面目に、一生懸命に真実を求めた人間が、ただ騙されただけで入っていくだろうか、そんなわけないと思ってたんだ。ただ一生懸命だったんだ、と。今日、オウムの教義がそんな荒唐無稽なものじゃなかったと聞いて本当に心から救われたと、何人かの家族の方から言われました。

私も同感です。私たちは「あんな事件を起こしたのは下らない連中だ」とレッテルを貼りたがるんです。何故かと言うと、その方が楽だからです。でも実際はそうとは言えないということが、オウムの研究をする中で分ってきました。

そのへんの事は、『なぜ人はカルトに惹かれるのか』という本を法藏館から去年出版していまして、そこに詳しく書いてありますので、もしよろしければ読んで頂ければありがたいと思います。

善い人こそオウムに入る

こちらは、10 年ほど前にアレフが配布したチラシです。京都のある大学で配布されたものです。アレフは今も非常に一生懸命活動しています。私も十年以上、随分長く脱会支援を続けています。

アレフは Web でボランティアサークルを装って勧誘していたりします。ボランティアに入る人とアレフに入る人は非常に親和性が高いんです。なぜなら、真面目で、人の役に立ちたくて、みんなを助けたいという思いを持っている人なんです。

地下鉄サリン事件実行犯の林郁夫もそうでしたね。彼は医者でオウムに入ったんです。なぜ、彼がオウムに入ったかといえば「医学で人間を完全に救うことはできない！」って事に悩んだからです。悩み苦しんだ後に麻原彰晃に会い「この教えに生きてこの教えを伝えていたならば、みんなを本当に救うことができる」と目覚めてオウムに入っていったんです。

結局、彼は地下鉄サリン事件の実行犯になり、今は無期懲役の判決で収監されています。

私が見たアレフの信者さんも、みんなを助けてみんなを幸せにしていきたいっていう思いに満ち溢れた人が本当に多かったんです。だから、ボランティアサークルを使って勧誘して、善い人を勧誘するということを盛んにやっていました。

カルトの定義と対処

ここからはカルトの定義とは何かということについてお話しします。私は「カルトって一体何なのですか？」「どういうものをカルトと定義してるんですか？」と良く聞かれます。これは私の定義ですが、私のように脱会支援をしている人のほとんどは現在こう考えています。

【カルトの定義】
カルトとは、ある特定の教義や思想、あるいは人物そのものを熱狂的に崇拝する集団であり、その組織的目的を達成するために詐欺的な手法を用いて勧誘したり、メンバーやメンバー候補者に対して過度な同調圧力を加えて人格を変容させたり、精神的肉体的に隷属させたり、経済的に無理な収奪を行うなどをするものをいう。（瓜生崇　2020 年作成）

最初に、「カルトとは、ある特定の教義や思想、あるいは人物そのものを熱狂的に崇拝する集団であり」とありますが、かつては、ここまでをカルトという言葉で表していました。ですから、アイドルオタクはアイドルカルト、鉄道に熱中してる人は鉄道カルトと呼ばれたりしていました。しかし、オウム真理教事件が起きてからは、そういう文脈でカルトという言葉を使うことはほぼなくなりました。

では、今、カルトという言葉はどういうものを指すのかと言うと、「その組織的目的を達成するために詐欺的な手法を用いて勧誘」と書きましたように、「私たちは宗教じゃないよ」「ボランティアサークルだよ」とか、そんな感じの嘘をついて宗教に勧誘するということです。そして「過度な同調圧力」によって、無理やり人格を変えてしまうとか、精神的・肉体的、あるいは経済的に収奪をする。そういうことをしてしまうところがカルトである、となっています。

「奇異に見えるからカルト」とは言えない

注意していただきたいのは「ある集団をカルトという基準は、その集団の教義や儀礼が奇異に見えるかどうかであってはならない」ということです。つまり、ヘンテコな奴らだからカルトだとは言えないし、言っちゃダメだっていうことです。

とても考えられない変なことを信じている人達、たとえば「イワシの頭真理教」という宗教があって、巨大なイワシの頭が地球を救うんだって毎日毎日イワシの頭を拝んでいる人たちが居たとします。それは私から見ると非常に奇異でインチキ臭いんです。でも「インチキ臭いから彼らはカルトだ」とは、絶対に言ってはなりません。日本は信教の自由を保証されています。当然、人権としてどんなものを信じる自由もあるんです。イワシの頭が世界を救うんだと信じていたって全然構わないんです。

しかし、イワシの頭を信じてる人たちが、イワシの頭を信じない人は地獄に落ちるんだぞと言って、無理やり人を勧誘して、同調圧力をかけたり、お金がない人から無理矢理引き落とさせたりとか、あるいは精神的に隷属させたり、性的に隷属させたり、そういうことをやったならば、これはカルトなんです。

逆に、伝統的な教団でも似たようなことをしている人も結構居ます。バチカンが声明を出していますけども、カトリック教会の神父さんが信者さんに対して性的な関係をもってしまう。そういうことを宗教的なバックグラウンドを持って要求する。こういうことはずっと前からあることです。

我々にだってあります。例えば、墓じまいする人に対して法外なお金を要求するなんてことは霊感商法に当たります。300 万円出さないと墓じまいさせないとかいうのは、宗教的なことを背景にして無理なお金を要求しているわけです。これをもってカルトだとは言えませんが、一種のカルト近い行いではあるということです。こういうことを自分もやってしまっていないかってことが自分に問われてきます。

変なものを信じている人たちがカルトになるんだって思うのは間違いで、本当はそうじゃないんです。そもそも、我々が信じているものだって他の人から見たら変なことを言っているように見えるでしょう。「お念仏、なんまんだぶつ一つが救いだ」って浄土真宗では言いますけれども、全然知らない人から見たなら変な呪文を唱えてお浄土に行こうとしているお気楽な人達と思われているかもしれません。

そんな事を思うと、人間の信仰というのは本当に不思議です。そういう不思議なものを人間の権利として、人権として認めてきたという長い歴史があるんです。

ですから、「変なこと信じるのはカルトだ」と言うのは、人間の歴史の中で我々が築き上げてきたことに反する行為だと言えます。その信仰の中で、何をやっているかということが問題なのであって、信仰そのものはカルトと切り離して行かなければいけません。これは本当に基本的なコンセンサスです。

「一人カルト」の登場

そういうことをわきまえた上で、じゃあ今どんなカルトの形態があるのかと言いますと、今回の主題

である「宗教カルト」、そして実は今、非常に大きな問題となっているのが「心理療法カルト」、これはセラピーとか自己啓発セミナーです。今、私のところに来ている相談でも非常に多いですね。そして、「政治カルト」とか「経済カルト」というものも非常に多いです。他にもまだありますが、実際のところ今深刻なのは実はこういったものです。宗教カルトは少しずつ力を失っています。インターネットで教団の情報が簡単に共有されていきますので、ある程度大きな規模の教団はその内実がネットの世界に溢れ出ていきます。そうなると入る人がいなくなり、抜ける人もでてきます。ここ 10 年ぐらいの傾向として「ネットを見てカルトを止めました」という人が多いです。

ただ、心理療法カルトとか自己啓発セミナーみたいなものはあんまり規模が大きくありません。私たちはこういうものを「一人カルト」と呼んでいます。カルトって集団のことを指して言うことばですから、少し矛盾のある変な呼称ですけどね。

教祖一人と取り巻き 3 人～4 人くらいでやっているような所もありますし、もう少し多くても 10 人～20 人程度の小さい集団です。そういう所での中の情報は外に出て行きません。そういうものがたくさん生まれて、そして何をやっているかも分からないままに対処しなければいけないのが、私たち支援者の悩みです。そういうものが毎年新しく生まれています。そうなりますと、例えば親鸞会だったらこう対策していけば良いとか、アレフだったらこうとか、ノウハウを蓄積していくのですが、そういうことができません。その都度その都度、かなりしんどい思いをして向き合っているというのが現状です。

例えば、昔流行ったＸジャパンというビジュアル系バンドなんですが、この中にいたトシさんというボーカルの人がホームオブハートという所に入って 12 年間で 11 億円を教団に貢いだということがありました。『洗脳』という本を出されて、赤裸々に書かれています。この人は凄い人です。普通、教団に入って脱会したというと色んな恥ずかしいことがあるもんですから、そういうことを隠していくんです。しかし、この方は「ここまで言ってええんか？！」っていうくらいに自分の事を赤裸々に語っていかれます。トシさんはここで「本当の愛を感じた」って言うんです。

これも有名な方ですが、歌手の辺見マリさん。この人も拝み屋に勧誘されて 5 億円を注ぎ込んだと言っています。「しくじり先生」という番組で本当に赤裸々に語っています。シッカリとした人ですよ。色んなことを考える能力もあって、厳しい人生を生き抜いてきた人が何故そういうところに入ってしまうのかってことが凄くよく分かります。

人間って、本当は何が正しいのかって何もわかりません。正直なところ私はどっちの道を歩んだらいいのか、私がどう生きたら良いのかってことって、究極的には分かりません。だから、私だって本当は何が正しいんだろうかって常に迷います。そして、これは間違いないというものをギュッとしたいわけです。そういう思いがみんなにあるわけです。だから私たちは「これが正しい」とか「間違いない」という言葉に弱いんです。芸能人なんかは、ほんのちょっとの自分の行いで人生がめちゃくちゃになるというような恐怖を常にもっていると思います。そういう人に、カルトは「この生き方があなたにとっては正しいんだ」ってお墨付きを与えてくれるんです。ですから、カルトはその中にいると居心地が良くて楽なんです。

人生の根源的な問いを抱えてカルトに入るんですが、その問いを抱える苦しみからカルトは開放してくれるんです。問いを奪い取ってくれるんですね。

そうなると、本当に肝心なことについて悩まなくて良くなるんです。自分の人生は神様に保証されていて、神様の意思によって完全に価値を与えられている。そういう感覚に陥るんです。これは迷いがないし楽で、充実するんです。これがカルトの特徴です。

中央大学という東京にある大きな私立大学のオリエンテーションで、薬物について話をしている先生がいました。その先生は薬物依存の〇〇先生と言われていて、私はカルトの瓜生先生と言われていました。その先生と教室で「薬物の〇〇はないよな」なんて話していたんですが、お昼ご飯を食べている時にこの先生が「瓜生さんの話、良くわかるよ。私もカルトに入っていたかもしれないね」と仰るんです。私が「どうしてそんなことを思われるんですか」と聞きました。

その方は元々新聞社の記者さんで、色んな事件とか色んな社会の出来事を取材していくと、人間の世の中に１００％正しいものは何もないということがわかるって言うんですね。「だから人間は迷わずには生きていけない」とその先生は言うんです。

そして「自分はどうしたら本当のことに生きることができるだろうか」と悩んだ時に、絶対的に困っている人を助ける仕事をしたなら、自分の人生は正しいと言えるんじゃないかと思って薬物依存の人たちを支援する仕事を初めたと、その先生は仰るんです。

だから、私は薬物依存の人を支援する活動に出あったから、そこに入ったけれども、もしあの時、カルト宗教に出あっていたら私は確実に入っていたでしょうと仰っておられました。

人間って、迷わないのが楽なんです。カルトに入

ると楽なんです。間違いないって言ってくれる存在が近くにあるので、それに自分を委ねていくことができるからです。カルトに限らず、宗教はそういう要素を持っています。しかし、カルトは非常に強くそれを持っているんです。

私は、本当の宗教ってものは人間をちゃんと迷わせてくれるものだと考えています。しかし、ちょっと自信はありません。それが正しいかと言われたら、そうでもないこともあるかもなと思ってしまいます。

高齢での入信

カルトは正体を隠します。これは非常に分かりやすい特徴です。「私たちはオウム真理教です」って勧誘しても、今入る人は居ません。だから、自分たちを隠して勧誘します。これは、色んなカルトに共通することです。ただ、隠さないカルトもありますから、例外はあります。

そして、不安を煽って法外な献金や資産提供の要求をして、指導者への絶対服従とか、信者の精神的、性的虐待、脱会する自由を認めないとか、そういうことをしていきます。

カルトの何が問題か

- 正体を隠した勧誘
- 不安を煽る教え込み
- 法外な献金や資産提供の要求
- 指導者への絶対服従
- 信者への精神的、性的虐待
- 脱会する自由を認めない

（櫻井2012）

ちょっと注目していただきたいんですが、法外な献金や資産提供の要求っていうのは若い信者に対してはあまりありません。なんでないのかって言うと、若い信者は金を持ってないからです。では、こういう要求はどこになされるのかと言うと、壮年層とか熟年層になされるわけです。カルトは若者だけの問題だと思いがちですが、実際に支援していてわかるのは 70 代、60 代の人が入ることが多いんです。会社勤めが一段落して入ったとか、子育てが一段落して入ったとか。

人間、何かに夢中になっている間は生きられます。ところが、そういうものが六十代半ばになってポコンとなくなってしまう。それで喪失感を感じた人がカルトに入っていくというパターンが凄く多いのです。こういう人たちが、カルトを経済的に支えていたりします。お金持ってますからね。じゃあ若い人は何を収奪されるのかと言うと、心だったり、肉体だったりします。若い人は人生を奪われ、高齢の人はお金を奪われるということがあります。

お寺の行事でカルトの話をしてくださいって言われたら「みなさんのお孫さんとか、息子さんがカルトに入らないように気をつけて聞いてくださいね」って主催者が言ったりするんですが、おまいりに来ている高齢の方が入るということが実は多いんです。

カルト二世問題

摂理という教団は、かつて教祖が性的暴行を繰り返して、100 人以上の人が被害にあったというおぞましい事件を起こしています。

当時は 2000 人位の信者が居ると言われていましたが、今は 3000 人近くになっていますので、増えていますね。鄭明析（チョン・ミョンソク）という人が教祖でしたが、韓国の刑務所に収監されて最近出てきたところです。ところが、性犯罪を犯した人ですから GPS を付けられていて、もう事件は起こせません。今は韓国で布教しています。

その摂理は日本では結構独特な発展を遂げていて、今も結構積極的に布教活動をしています。大学でも「ゴスペルやりませんか？」とか言って勧誘して信者を増やしています。教祖はもう韓国から出られませんし、今この教団に性犯罪的なことはありません。そうなると、みんなで楽しくゴスペル歌って神様の愛を語っている教団ですから、この教団の何が悪いのかっていう声も出てきています。

カルトの非常に難しいところですが、かつて問題があった教団が結構変わってしまうということが良くあります。

そうなった時、我々はどうやってそれに向きあっていけば良いのか。これは今後の課題です。例えば、アレフが、今、地下鉄サリン事件みたいなことを起こせるのか？って言ったら、無理でしょうね。

富士大石寺顕正会という団体は中学生や高校生なんかも多く入っています。あと、統一教会、今は名前を変えて、家庭連合という名前になっています。今でも韓国のソウルで合同結婚式をしています。これらのような古めの教団では、信者の中核層はほとんど二世三世の信者になっています。ですから、こういう教団のカルト問題は二世問題と言われています。親が統一教会の信者で、その親に半ば押し付けられるような形で悩んで苦しんできた信者の相談が今は増えています。二世信者には二世信者だからこその難しい問題があります。教団を抜けても帰っていく場所がないんです。私は親鸞会という教団に入って、そこ疑問に感じて辞めても両親の元に帰ってくことができたわけですが、二世信者の人たちは教団がおかしいと思ってやめても両親がカチカチの信者なわけですから、そこに帰っていけないという問

題があります。自分の居場所はそこにしかないと思った時、自分の心を教団に合わせて無理に順応していってしまう。そういう問題が出てきます。

勧誘方法の変化

今はコロナがありますから直接対面で誘うような勧誘は出来なくなってしまいましたが、かつては大学内で直接勧誘したり、街角で手相を見て勧誘したりしていました。

しかし、今はほぼ SNS での勧誘になってきています。感覚的には 7～8 割くらいが SNS 勧誘です、今だったら Facebook や twitter とか、LINE のグループなんかでも一生懸命にやっています。アレフは出会い系サイト使ってやっているということで、その実態を確かめてきてもらえませんかと言われて出会い系サイトに登録したこともあります。オウムとは別の意味で人間の闇を見ることになって速攻で退会しましたので、実情はわかりませんでしたけれども。

とにかく、大学側がちゃんと対策をするようになって、カルトの勧誘はインターネットの海の中に潜っていきました。龍谷大学さんがカルトについての啓発をやっていただけるなら、そういうことを学生に伝えていただきたいですね。ネットで知り合った人とそう簡単に会ってはいけないということです。これは、どんな世代でも言えることですけどもすごく大事なことです。

あとは高校生に対して LINE のグループなんかを使って「大学のキャンパスで活動をしようよ」なんて誘ったりとか、摂理なんかは早稲田大学に合格するための私塾みたいなとこまで作って高校生に関与しています。本当にあれやこれやと良く思いつくなと思います。

今、コロナ時代になってきましたから、ZOOM とかで大学の生活を高校生に教えるよとか、有名な大学に受かるコツを教えるよみたいな名目を持って学生を勧誘したりしています。

あと教団の中にも、有名な大企業に勤めている人が居ますので、そういう信者が大学生に対して就活のオンラインセミナーを開催して、そこから学生を勧誘するということも盛んに行われています。摂理はスポーツサークル、フットサルとかでの勧誘も行っています。

人間の心の不安定さ

人間の心が、何故こんなにも急速に一つの信念に染まってしまうのか、ということについては社会心理学という学問が扱ってきました。

そういう疑問を人類に非常に深く考えさせたきっかけとなったのが、第二次世界対戦のナチス問題でした。ナチスは 500 万とか 600 万人のユダヤ人を虐殺しましたが、その過程でユダヤ人を殺すということについて、おかしいのではないか、我々は間違っているのではないか、という声が上がったり批判があったのかって言うと、ほぼなかったと言われています。それは、そういうことが言えない雰囲気だったんじゃないかと思われるかも知れません。あの当時、ナチスは障がい者も殺していましたが、障がい者の虐殺に関しては批判的な意見がいっぱい出ています。しかし、ユダヤ人を殺すことに関してほとんどそういうことはありませんでした。

最近の研究ですと 80 万人くらいのドイツ人が虐殺に関わったと言われています。80 万人のドイツ人がユダヤ人を粛々と殺し続けたのです。今、我々が 500 万人のユダヤ人を殺すことが是であるかと問うて、それは良いことだと言う人は居ないでしょう。しかし、当時の人たちはそれが正しいと思っていました。何故、人間の心はそんな風に変わってしまうのでしょうか。

大戦終了後、それを解明しようと様々な心理学的実験が行われました。今ではとても出来ないような実験や、データの集め方にかなり問題がある実験もありましたが、とにかく色々な実験が行われました。その時に分かったのは、我々は周囲の圧力と言いますか、周りの意見を自分のものとして取り込んで、これは俺がそう決めたんだとすぐに思ってしまうということです。

エーリッヒ・フロムという人の書いた『自由からの逃走』という本があります。

我々の決断の大部分は、実際には我々自身のものではなく、外部から我々に示唆されるものである。決断を下したのは自分であると信じることは出来ても、実際には孤独の恐ろしさや、我々の生命、自由、安楽に対する、より直接的な脅威に駆り立てられて、他人の期待に歩調を合わせているのである。
エーリッヒ・フロム「自由からの逃走」

私たちは、善悪の判断基準とか、モラルとか、そういうものが人類普遍のものとして存在して、それを理性的に選択して生きていると勘違いしているんですが、実際にはそんなことは全然ないということです。善いことをしようと思って人を殺すこともあるし、人を助けようとしてとんでもない差別をすることもある。それは何故かと言えば、周りが言っている「これが正しい」とか「これが間違いない」ということに自分を合わせて生きているからです。これが、我々人間なんです。

だから周りが「ユダヤ人を殺すことは善いいいことなのだ」と言うところに入ったなら、私たちもそうなります。周り中が「この人が真実の仏陀であり最終解脱者だ」となったら、私たちもそうなるんで

す。それが私たちの正体なのだっていうことが分かってきたんです。

ですから、今私たちは、たまたま人権は大事で、男女は平等で、そういう周りの人たちの中に生きてきたから、そういう世の中になってきたから、私たちそう思っているだけであって、本当は自分の中に判断基準がしっかりと存在してそう感じているんじゃないということなんです。

ちょっと昔までは、女の人がずっとお茶を汲んで、男の人はドンドン立場が上がっていくというのが普通だったわけでしょう。今はそんなこと考えられません。

じゃあ、私たちのモラルが上がってきたのでしょうか。そんなことは全然ありません。周りがそういう風になってきたから、そうなっているだけです。

ということは、ある集団の中に私たちが入って、強い信念にさらされていけば私たちの心なんか簡単にひっくり返ってしまうということです。

カルトに入りにくい学生の特徴

では、どういう大学生がカルトに入り難いのでしょうか。北海道大学の櫻井義秀という先生がこう書いています。

どういう人がカルトに入らないか

・「悪事」をしたい大学生
・自分のことしか考えない大学生
・理想のない大学生
・明日の生活にも困る貧乏な大学生
・勇気、意気地のない大学生
・威張り散らす「偉い」大学生
・何ごとにも一生懸命になれない大学生

こういう人たちはカルトには入りません。入れないんです。逆に言えば、正しく生きたいと思ったり、みんなを助けたいと思ったり、人生に大きな理想をもっていたりとか、そういう人が入っていきます。威張り散らす人も入りません。謙虚で人の意見を聞いて、そして周りにあわしていくような、私らの社会で言ったら「あの人まともな人だな」という人が入っていくんです。

カルトに入った学生の変化

カルトの支援やっていた人なら、共通して思ってることですが、カルトに入った学生は次の様に変わっていきます。若干極端ですが、

カルト宗教・親が異変に気づくポイント

・生活時間が突然朝早く、夜遅くなる。
・お笑いやバラエティーなどのテレビ番組を一切見なくなる。
・漫画雑誌などを全く読まなくなる。
・煙草や酒を一切嗜まなくなる。友人との飲み会にも行かなくなる。
・親に反抗的で無関心だったのに、急に優しくなる。家事を手伝ったり、「愛してくれてありがとう」などと伝えてくる（東北学院大学　川島教授）

これを見て「良い子になるという事ですか？」と思うかも知れませんが、その通りなんです。

今まで、反抗的だった人が親の言うことをちゃんと聞くようなったり、お酒に溺れていた人がお酒を飲まなくなるということです。

身近な人がカルトに入ってしまったら

では、カルトに入った人が居たら私たちはどうすれば良いのか、どういった初動を心がければ良いかというのが、次です。

友達が入ってしまったら？

1 絶対に相手の信仰を否定しない
2 なぜカルトに入ったのか、理由や動機を親身になって聞く。
3 対話と信頼関係を継続する努力をする。
4 大学のしかるべき教職員に相談する。

まず、「そんなインチキみたいな所に入って、バカかおまえ！」とは絶対に言ったらいかんということです。何故かと言えば、そこで否定されるのは、その人が大事に大事に守り育ててきたものだからです。それを否定したら、その時点でその人とのコミュニケーションが全くとれなってしまいます。

そして、理由や動機を親身になって聞いていく。聞き役に回るということが大切です。「間違っているんだ」って説得するのではなく、私がその人の信仰を聞いていく。それによって、会話と信頼関係を継続するという布石を打った上で、専門家に相談してください。

龍谷大学で言えば、宗教部がおそらくそういう部署になっているのかもしれませんけど、他の大学でしたら学生課とか、そういうところに対処できる人材を置いていただいて、その人に相談するようにしてください。これが一つの流れです。

自分たちで何とかできるとは絶対思わないでください。専門家に相談できるまで、会話をする努力を継続してください。これが一番大事なことです。

普通の人が説得して、俺がやったことが間違っていたと思えるかと言うと、そんな容易いものじゃないと思います。もの凄く長い時間をかけてやらないといけないことなんです。

自分たちが正常で、あいつらが異常だという前提で、異常な人たちを目覚まして正常なところに戻すのが脱会支援だと思われていますが、それは全く違います。これをやってしまうと、100%の正しさと100%の正しさのぶつかり合いです。お互いに正しさを譲らないので、何の対話も生まれません。断絶を作るだけです。

ではどういう態度で臨めば良いのかと言えば、自分たちは正常だと思っていても、一生懸命にやっている人たちを見て、本当に私って正しいんだろうか、そういう私が迷って揺らいで自分が今まで間違いなく社会の中でちゃんと役目を果たして、まともな生き方をしてきたのか、本当はどうなんだろうか、私が生きるって何なんだろうか、私が死ぬってなんなんだろうか、人間って何なんだろうかと、今まで目も向けて無かった課題に彼ら彼女らは向き合っているのだから、相手の方が実は人生に対して誠実なんじゃないだろうか、という風に、我々が揺らぐことができて初めて彼らも私たちの言うことを聞いてくれるようになります。

私たちは絶対的に正しくて相手は絶対間違っているとすれば、カルトの側も同じ立場なんですよ。我々は間違っているんじゃないんだろうか、彼らのやっていることも一理あるんじゃないんだろうかって立場に立てて初めてそこに対話が生まれます。

私が揺らぐことによって相手も揺らぐことができるんです。15年やってきてやっとわかってきたところです。そこから、お互いに批判できるようになるんです。

一方的に相手を説得して改心させるんだっていうところからはカルト脱会支援は生まれて来ないってことがわかります。相手もこっちのいうことはねつけますし、こっちの言うことなんて聞けないって言うことになってきますから、それではもう何も起こらないです。

最後にこれは摂理という100人の女性を強姦した団体のスナップです。みんな明るくて楽しんでいるように見えます。

カルトは薄暗くて何か異常な信念にとり付かれたようになってしまっているのがカルトだというイメージがあるかも知れませんが、明るくて楽しくてやりがいがあって、だからこそやめ難くて恐ろしいんです。

カルトの中にある問題は見え難いということを知っておいてください。

時間を超出してしまいましたが、これでお話を終えさせていただきます。ありがとうございました。

Q&A

Q1　ちゃんと学校に来る学生にどう対処すべき？

12年ぐらい前に、多くの学生がアレフに勧誘される状況がありました。その時に、アレフに関わった学生のほとんどが授業に来なくなり、学校を辞めていくという状況があったので、随分一生懸命対応した記憶あるんですが、最近はどうもそうじゃなく、ちゃんと学校にも来て真面目にしているというようなこともあるようです。そうなると、私たちは何もしなくていいのか、どうしたら良いのか少し迷うんですけども、その辺なにかアドバイスしていただけませんでしょうか。

A.　今の学生はちゃんと授業を受けて卒業します。全員がそうかはわかりませんが、アレフの側でもそういう指導をしているみたいです。感心な学生が多いんです。だったら放っとけば良いのではないかと、当然言われることもあるんですが、そうじゃないと思います。大学を卒業した後に社会に出ていくんですけども、会社に入って行く時に相当な制限があります。アレフに入っていると飲食店はほぼダメです。殺生するからです。そして他の正規雇用についてもやっぱりダメだと言われます。やめなさいって言われます。非正規で働きなさいって言われます。なぜかと言ったら教団の側に使う時間が沢山なければだめだから、正社員になって会社にドップリに成ると教団は困るんです。

そうやって、色々な人生の選択肢が狭められて、最終的に出家してしまうという人が結構多いんです。

大学もちゃんと行って、ちゃんと働いて生きてくんだから良いじゃないかっていう思いも当然ありますし、そこは否定するべきじゃないと思います。

私たちの側が向き合っていくにおいて、アレフをやめることが本当に正解なのかという問いを持ち続けて彼らと向き合うってことが大事だと思います。アレフをやめることがいいことだという信念で彼らと向き合うことは良くないと思います。

本当にアレフでしか生きられないなら、アレフで生きていく道もあるんじゃないだろうか、アレフをやめさせるのが正しいと思っているけど、本当にそうかという疑問を持って、学生と向き合っていくことが大切だと思います。学生課の職員の方なんかが長く学生と関係を続けていけている場合、大体そういう関係が築かれていることが多いです。カルトをやめさせることが正義だというような感覚で学生と向き合っていくとしたら、それは続かないですよね。

関係が続かないと、学生が教団に疑問を持ったり、教団の中で虐待があったり、そういう時にしかるべき人に相談できなくなってしまいます。

私たちの側が結論を持たずに、とにかく彼らとの対話のチャンネルを、細くても良いから持ち続けることがすごく大事だと思います。

Q2　SNS での勧誘について見抜くポイントはあるか？　SNS を巧妙に使って正体を偽ってカルト集団が学生にアプローチしているという話があったんですけれども、インスタとか twitter とかで見分けるポイント、こういうのはちょっと怪しいなとか先生お持ちでしたら教えて欲しいってのが一点です。もう一つが、ご本人は何か困っている状態ではなく保護者の方が「うちの子カルトにハマっているかもしれない」ってご相談があった場合に、どのようにして本人との対話を始めたらいいのか。この２点教えてください。

A.　まず SNS のアカウントでカルトかどうか判明するかと言ったらほぼ不可能です。

実際に、代表的ないくつかの Facebook とかを見せましたけども、サークルとかですね、多分ああいったものを見て、これがカルトだとは誰もわからなかったと思います。私たちも、依頼があって学生と対話して、どっから入ったのと聞いて、あーこれがそうだったのか、と初めて分かるんです。

しかも、サークル等のアカウントが直接に勧誘するわけじゃなくて、勧誘してくるのはあくまでも個人のアカウントです。個人のアカウントは普通の学生さんがやっているようなアカウントですから、そうなるとさらに分からないですよね。これがカルトだと判断する方法については、ずっと模索してきましたけども、ないと言っていいんじゃないかなと思います。

親御さんから相談が来るというパターンですが、実際 7 割くらいはそうです。

自分の子どもが入ったっていうパターンです。

そういう場合、私たち支援者はその親御さんを支援することがメインになります。だから学生と直接私らみたいな立場の人間が会って話すのは本当に最終段階で、それまではその周辺の人にカルトとは何かということをわかってもらいます。

例えば、信仰を否定しないで対話のチャンネルを継続するというようなことを一緒に学んでいくんです。それが最初の初動です。

今までのケースだと、例えば、4 回生でゼミに入っているならゼミの先生のところに親御さんと行って話を聞いてもらったりとか。学生がそういう教団に入った場合どう向き合っていけば良いかをお互いに情報共有していきます。

それが十分できて対話のチャンネルが築かれた段階で、学生課とか宗教部の職員の方っていうものが、友達とかゼミの先生とかを通して本人に会って話を聞いていくというのが今まで行ってきたことです。

ただ、これはケースバイケースで、人によって接し方のベストは違ってくると思います。

もう出家すると聞いて、初めて親が慌てて駆け込んで来て、既にどっぷり浸かっていてもう決心しているという時は、もうすぐにでも会わなくてはならないような時もあります。

本当に色々です。今までで最悪だなと思ったある大学の話としては、学生が 4 回生で、もう卒業間近だったので、箝口令を敷いて「うちの大学にオウムの信者なんていなかった」ということにしたということがありました。口止めですね。

龍大はそんなことはしないと信じています。

参考資料

・『なぜ人はカルトに惹かれるのか　脱会支援の現場から』　瓜生　崇　法蔵館 2020

・『「カルト」の楽しさ、「自由」のしんどさ』 竹内　綱史　りゅうこくブックス 134（宗教部 2020）

・カルトの被害から学生を守るための基本方針　龍谷大学
（Attention 安全な学生生活を送るために龍大生として知っておきたいアレコレ

発行　龍谷大学宗教部　／　発行日　2021 年 6 月 23 日